

第 181 回松本歯科大学大学院セミナー

日 時: 2008 年 11 月 10 日(月) 17 時 00 分~18 時 00 分

場 所: 実習館 2 階総合歯科医学研究所セミナールーム

演 者: 三枝 英人 氏 (日本医科大学耳鼻咽喉科学教室・講師)

タイトル: 嚥下の成り立ちとその障害について考える

現代では、経管栄養や中心静脈栄養などの代替栄養法の進歩に伴い、嚥下障害に伴う栄養不良や脱水により重篤な状態に至ることは少なく、嚥下障害そのものが直接「死」を意味することはなくなってきている(少なくとも日本では)。一方で、嚥下が水分・栄養摂取という生命の根源的要求に従った機能であるためであろう、身体の他の障害に比較して、その改善・回復への要求は根深いものがある。更に、嚥下に障害が起これば、障害の発症した個人を取り巻く様々な諸問題と共に、家族を始めとした周囲の人々(「食事の介助が大変」「気管内吸引で夜も眠れない」など)、更に介護者や医療者側へと(「嚥下障害がある患者はお断り」「手間が掛かる」など)様々な問題を引き起こしてくる。すなわち嚥下障害は、水分・栄養摂取、誤嚥に伴う肺炎等の下気道の問題という生命危機の問題であると共に、心身に関する様々な重大な個人的問題、経済を含む家族の問題、社会的な問題でもある。一方、動物界を見回して、ヒト以外に嚥下障害を発症し、悩む動物はいない。ヒトのヒトたる所以は、二足で立ち上がる(直立)と共に、発話を行うことであると言われているが、これらの成立に至った歴史的事実とヒトの嚥下の成り立ちを考えることは無意味では無かろう。このことは、這い這いから、高這い、つかまり立ち、そして二足歩行へと、同時に哺乳から離乳食へ、そしてことばを発し始めるという子供の成長・発達を一瞥するだけでも容易に理解される。ヒトが直立を獲得したのは、樹上生活から草原に下り立った時に、遠くを眺めようとする衝動によるためであったとされている。そして、直立により得た視界の拡大は、獲物や外敵に対する生物学的距離の見積もりではない新たな感嘆を伴うものであったという。嚥下が障害されないうちは、それらのことは全く意識することなく過ごしているが、一度、嚥下に障害が発生すると、私達はその事実の重大さに慌てふためくのであるが、“振り返って”観察を行うとその中にヒトの嚥下を成立させた悠久の歴史の痕跡を様々な、かつ容易に見出すことが出来る。それを無視したまま、もしくは痕跡の意味を紐解かぬまま、今、眼前に在る状態としての嚥下障害にアプローチしても、有効な効果、十分な効果は得られないであろう。今あるヒトの姿を見詰め直すことで嚥下と共に、その障害について考えたい。

担当: 顎口腔機能制御学講座 井上 勝博

健康増進口腔科学講座 松尾浩一郎